
アディオス・ノニーノ～さようなら、お父さん～

アイリーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アディオス・ノニーノ〜さようなら、お父さん〜

【Nコード】

N2946R

【作者名】

アイリーン

【あらすじ】

広島に住む女の子が好きになったのは、外国の本物の王子様だった。それも、次期国王となる高貴な男性。彼女の想いは届くのか？そしてそれが実る時、彼女は愛する家族と愛する男性のどちらを選ぶのか？これは、円城寺マキ先生の作品『プライベート・プリンス』をベースにした、真実になるかもしれない物語です。ハッピーエンドになります。ウィリアム王子とケイトさん、結婚おめでとう

第1話 前書き(前書き)

主人公

・工藤真希、24歳。広島県在住の女の子。アスペルガー（自閉症の高知能バージョン）という障害を持っている。

・ギョーム・ルイス・クリスチャン、28歳。ハンストヘテルブルクの公太子。

などなど他多数出てきます。この小説は連載ですので、応援よろしくお願いします。

第1話 前書き

私は日本の広島に住む24歳の女の子。

私は今、大きく重大な選択を迫られている。

それ次第では、愛する家族か愛する人がどちらかを選ばなければならず、

選ばなかった方とは、永遠の別れが待っている。

もう、会えないのだ。私の愛している父親と……

そんな私達を救ってくれたのは、私の愛する彼の母親だった。

彼女もまた、私と同じ想いをして海を渡ったことを知る。

そして、自分の家族や愛する人の家族に、彼の国民に支えられ、支持されて……

私は、海を渡ることにした。

アディオス・オニーノ〜さようなら、お父さん〜

第2話 大切なのは・・・（前書き）

こないだ始めたばかりの小説ですが、どなたかがお気に入り登録をしてくれていました。思わず「あり得ない！！」と思ってしまいました。とっても嬉しいです。感想などどしどしお待ちしています。

第2話 大切なのは・・・

彼と出会った時、私はなんのことだかわからなかった。

あり得なかった。

だって、私美人じゃないし、障害をもってるって言ったら、

みんな手のひらを返したように離れていくだけだった。

でも、彼は違った。

「そんなの関係ない。

ボクに近づいてくる女性は外見だけを磨く人が多いが、君は違う。

君は心の底から人を愛し、慈しみ、人の悲しみに共感できる素晴らしい心の持ち主だ。

仮面をかぶって称号欲しさに近づく人よりも、

君みたいな純粹で綺麗な心の持ち主が、ボクは好きだよ。

障害なんて気にしないから。

ね？大丈夫。ボクがいつまでも側にいて支えてあげる。

君の悲しみ、痛みをボクが代えてあげる。

だから、一緒に行こう。ボクと未来を生きよう。

今度の日曜日、いつもの場所で待ってるから・・・」

そんな手紙が届いたのは、そんな不安な私の心境を察したかのようなタイミングだった。

そして、私は彼に自分の気持ちを伝える為に彼の国へ向かった。

しかし、後に大変な事態が私たちを待っていたなんて、誰も予想できなかった。

第3話 夢のような

そして、日曜日…

(ハンストへテルブルク国内某所)

私は彼より早く着いた。その場所は、美しい噴水のある緑豊かな公園で、野鳥たちが心地よい鳴き声を聞かせてくれていた。

(本当に来るのかしら……?)

そんなことを考えていると、後ろから待ち望んだ声が聞こえた。

「真希!! 待った?」

その姿を見て、私は思わず言葉を失ってしまった。

凛々しさ、高貴さ、生まれもつての特別なオーラ。世界中の女性が憧れる存在。

そんな人物が、今私の目の前に立っている。

「…………王子様みたい／＼／」

羨望の眼差しで見つめる。

彼の白い八重歯がキラッと光る。

「そりゃあ、ハンストヘテルブルク公国王室のファミリーですから、お嬢さん？」

そう言い、彼は私の手を優しく取る。

「止めてよ／＼／私、あなたが思う望むような女性じゃないんだから！…！」

私は…………洗練された彼に相応しい女性じゃあない…………

障害

それは、ロイヤルファミリーには加わってはならない。

いや、普通の家庭にもその血が加わることも嫌がられるだろう。

彼との未来を想像すると、思わず涙が出る。

「嫌、かな…………？」

「うっん！…そうじゃないの！…とても不安で……」

彼は私をいきなり抱き締めた。

ふぁっとなかぬかいがする。

自然と涙が止まる。

「ありがとう……私でよければ……これからもよろしくお願いしま
す！…」

木々の木漏れ日の間を談笑をしながら歩く。

とても嬉しく幸せなひと時。

夢みたい……こんな日々が永遠に続いたら……

カシャ

カシャ

私たちは気づかなかつた。その時、試練への序章が始まっていたこ
とに……

第4話 王族故の苦悩（前書き）

みなさん、かなあ〜りご無沙汰です。久しぶりに更新したので、あら？と感じるところもあるかもしれません。

第4話 王族故の苦悩

それから数日後、私の不安は現実のものとなってしまつた。

(ハンストへテルブルグ王居)

？「ちょっと、ギョーム？これはいったいどうゆうことなの？説明しなさい！-！」

そう言いながらこの国の公太子に近付いて来たのは、彼の母親であるマリーン公妃だった。彼女の右手には、こんな見出しが踊っている週刊誌新聞が握られていた。

【ハンストへテルブルグ公国次期大公ギョーム公太子に新恋人発覚
！！相手はなんと日本の広島に住む障害者】

マリーン公妃「障害者なんかと付き合っているなんて…王室の恥に

なります。今すぐ別れなさい!!」

ギヨーム公太子「どうしてなのですか？ 障害者だから何が悪い！？王室の一員として産まれたとしても、同じ人の子。王室メンバーにハンデを持って産まれてくる王子王女だっているはずですよ!!」

マリン公妃「いいえ、とにかく許しません!!あなたには由緒正しい家柄のお嬢様と結婚してもらいます。もう先方とはお互いが産まれた時から結婚の約束をしているのですから!!」

ギヨームの両手は固く握り締められて震えていた。

ギヨーム公太子「…なんだよ…なんなんだよ!!どうして恋さえ自由にさせてもらえないんだ!？お母様の考えは古すぎる!!もっと新しい風も必要なんです!!…とにかく、ボクは諦めませんから!!例え世界中を敵にまわしてもね…」

そう言ってギヨーム公太子は扉を激しく閉めて部屋をすごい勢いで出て行った。

(王族に産まれなければよかった…そうすれば、こんな想いをしなくてすむのに……………)

第4話 王族故の苦悩（後書き）

みなさんは、世界の王室メンバーの中でお気に入りの王女や王子、メンバーなどはいますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2946r/>

アディオス・ノニーノ～さようなら、お父さん～

2011年12月20日14時47分発行